佳作

やりたいことを

秋田県鹿角市立十和田中学校
２年　木村　珠莉

未来の自分に伝えたいことと言われても、別に何も思いつかない。すぐ人に言えるほど考えていないし、考える必要もないと思っている。だから、今自分の中にあるものを書いて、最後は未来の自分に伝えられる文になった、という形で終わりたい。少し、私の過去にあった出来事を話させてほしい。

私は５年生のとき、病気で長期入院をした。でも、この病気は心の病からきていて、１年生の頃からずっと悩まされてきた。そして今も多分、病気は完治していない。もしかすると生涯ずっと、この病気とつき合うことになるのかもしれない。ふとした瞬間、そのことが頭にちらつき、不安定な心のいらだちのせいで何かを欲する。罪悪感のループは止まることがない。突然自分に自信がなくなって生活するのも毎日のことだった。入院生活でつらかったこと。常に感情の起伏が激しい。カテーテル治療でそれはもっと激しくなった。それでも少しずつ体調を戻し､なくなった体力を戻すために病院内のリハビリに通った。

そこに私の担当をしてくれた理学療法士さんがいた。その人は明るく、元気で笑顔が絶えない少し大柄な体格の女性だった。先生は、私にとっては安心して頼れる存在だった。最初は歩けなかった私を、大きな温かい手で包んでくれる。何か一つ、小さなできることが増えたときすごく喜んでくれる。私でもやりやすいメニューを考えてくれる。リハビリノートを作って、不安なこと、できるようになったこと、あと少し絵を描くと、いつも先生が使ってるピンク色のペンで一つ一つコメントをしてくれた。その先生の優しさ一つ一つが、私はとても嬉しかった。今あの時のことを思い返すと、すごく恥ずかしくなってくるが、私はあの先生と過ごした時間を、将来どんなことがあっても忘れたくないと思った。先生にどれだけ助けてもらったのだろう。今になって、先生の存在、先生への思いは、大きくなるばかりだ。先生の隣にいると、自分も人を支えてあげられる存在になりたいと思うようになった。そして先生のように、一つ一つの些細なことにも気付けて、患者さんに寄り添うことのできる人になりたいと思った。少しだけ、入院中先生に車いすを押してもらってコンビニに寄ったことがある。段差で、点滴のレールが引っかかって音が鳴り、先生があわてて直していた。一生懸命で、でも面白くて。そんなお茶目な一面がある先生も大好きだった。長い下り廊下を、少し足早に押す先生。「危ないなあ」と思いながらも、その時吹く風が気持ちよくて。あの時初めて、こんな入院生活でも

楽しいことなんてあるんだと思った。行きたくなかったリハビリの時間が、私の楽しみとなった。リハビリステーション。幅広い世代の人が、いろいろなリハビリをしている。つらいこともたくさんある。でも、そこには先生たちの温かいサポートと、患者さんの笑顔があった。

　でも、私には、理学療法士ともう一つなりたい夢がある。女優だ。予想もつかなくて驚くと思う。私は小さい頃から、この職業に憧れをもっていた。人物になりきって化ける演技力が必要になる。そして、自分の個性、オーラ、スタイルなど人をひきつける力も求められる。私とは程遠い世界だ。突然だが皆さんはこんな体験をしたことがあるだろうか。好きなドラマが始まる時、ユーチューブで好きなアーティストの新曲が出る時、あと何分……と待つ。始まると手をとめて見入る。世界に吸いこまれて、笑い、喜び、悲しみ、驚き……。たくさんの感情を味わわせてくれる。こんなことのできる職業になれたら……と思った。そんなことができたら、今まで自分に自信がなかった私も、変わることができるのかな。女優さんは皆光って見える。私も、その場所に立ってみたいという気持ちが大きくなった。

　理学療法士という現実性のある仕事と、女優という夢を与える仕事。どちらも同じようにやってみたい。でも将来、自分はどっちの道に行くのか分からない。違う仕事になっているかもしれない。「未来の自分」。言葉だけ見ると希望しかない感じがする。でも実際はきつくてもうやめてしまいたい、ということの方が多いのかもしれない。でも、どの道に進んだとしても、やってみたいと思ったらとことん挑戦していきたいと思う。私は臆病で、チャレンジ精神があるとはいえない。自分がいける限りの所まで登って、その達成感や喜びをこれからたくさん味わいたいと思う。「無理かなあ」とか思っても「まあ、あと少し」と私の楽観的な感じで自分らしくやっていきたいと思う。自分のペースで前に進んでいけるよう、がんばりたい。自分のやりたいことを思いっきり楽しめるようになりたい。難しいことかもしれないけれど。これが、私が一番かなえたい夢だ。